

板状粘土をレリーフに構成して！

—— 色化粧土で彩色した「四季のイメージ」 ——



写真1 「夏のイメージ」〔約1150℃焼成／無釉〕（縦26cm×横29cm）

表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：楽焼用粘土、色化粧土
- ・造形要素（色／形／材質）：半立体のレリーフとして、四季をイメージした色や形
- ・表現技法：板づくり、切り針による粘土の切り取り、貼りつけ、型押し、化粧土による彩色、線彫り、ほか
- ・表現様式：抽象形／半具象形
- ・表現対象／主題：四季の抽象的イメージ／表現者が表現したい季節のイメージを思考、追究、決定する

造形発想と表現について

粘土を板状に延ばし、イメージした季節の形を切り取ってレリーフのグラウンドをつくる。グラウンドの上に形を貼り重ねたり、くり抜いたりして凹凸をつけながら季節のイメージを構成していく。板状粘土を生かした半立体的な表現である。

さらに、でき上がった半立体の形に色化粧土で彩色して季節感を引き出す。

ここでは、四季のイメージをテーマに季節の感じや印象を抽象的な形や色に置き換え、焼き物のレリーフとして表現していく。

感覚や感性には正否は無く、各自の考えや直感的な感覚、感性を大切に大胆に表現したい。

レリーフは無釉で1150℃前後で焼き締めるように焼成した。

吊るし穴をリボンなどで結んで部屋の壁掛けにしても洒落ている。

用具／材料

楽焼用粘土（約1.5kg）、どべ、化粧土（白、黒、青、緑、黄、茶、ピンク、水色／あるいは練り込み用顔料各色）、粘土板、タタラ板（厚さ8mm）、粘土延べ棒、粘土べら、粘土切り針、敷布（綿布／麻布ほか）、切り糸、（クレイガン、）なめし革、筆、パレット、カップ（どべ入れ／化粧土入れ）、雑巾、新聞紙ほか

表現のプロセスと内容

●季節のイメージに合わせた形に、粘土を板状に延ばす

- ・約 1 kg の粘土をハンバーグ状に延ばしてから布の上に置く。
- ・レリーフそのものを、どのような形にするか、大まかな形を決めておく。
- ・手の平で丁寧に叩き、できるだけイメージに合った形に延ばしていく。(写真2)

●タタラ板と粘土延べ棒で厚さと表面を均質に延ばす

- ・ここでは 8mm のタタラ板を使って、8mm の厚さに延ばした。(写真3)
《たたら板と粘土延べ棒は、ある程度板状

に延ばした粘土の厚さを整えて、表面を均質にするための仕上げとして使う。》

●イメージしたレリーの形を粘土切り針で切り取り、形を整える

- ・外形を切り取る。(写真4、5)
《あらかじめ切り取る形を粘土べらなどで軽く描いておくとよい。》
- ・形の中を切り抜くこともできる。(写真6)
《切り抜いた形をそのまま使うこともできる。形のネガとポジの関係になる。》
- ・切り口をなめし革や布などできれいに整える。(写真7)



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7

●季節のイメージや構成を考えながら部品をつくったり、貼りつけたり、型押ししたりして表現する

- ・切り抜いた形や貼り重ねる形をグラウンドに置き、バランスや表現したい季節のイメージなどを確認する。(写真8)
- ・およその位置が決まったら、貼る形にどべを十分につけ、しっかりと押さえてつける。(写真9、10)
- ・レリーフの側面に形をつけ加えることもできる。(写真11)
- ・薄く延ばした粘土の板をドレープ状に貼る

表現例。(写真12)

- ・イメージに合わせて丸めた粘土、ひも状粘土、带状粘土などをつけ加える。(写真13)
- ・クレイガンで糸状粘土をつくって使うこともできる。(写真14)

《糸状粘土を貼りつける部分に十分にどべをつけ、軽く押さえるようにつける。(写真15、16)

※クレイガンを使った表現や使い方等については改めて機会を設けて紹介するので、ここでは参考程度の説明に止めておく。



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16

- 物の形や印などを利用し、型押しで模様をつける表現例。(写真 17)
《鉛筆やキャップなど、形が写るものならどのようなものでも使える。》
《同じ形の繰り返しの面白さや、凹凸をつけることでさまざまなテクスチャーを表現できる。》
- レリーフに曲面をつけるときには、紙を丸めた心を入れて押さえる。(写真 18)
《曲面の広さや高さに合わせ、新聞紙を丸めて使うとよい。あまり極端な凹凸をつけることは避けるようにする。》

●粘土べらで吊るし穴をあける

- レリーフの方向性や重さのバランスを考えて穴の位置を決める。一つ穴と二つ穴をあけて吊るす方法がある。(写真 19)

●完成した作品を生乾き状態まで乾燥させる

- 化粧土の彩色は、作品が生乾きの状態であることが必要である。乾燥が進んだ状態に彩色すると化粧土が剥落する。また、未乾燥では、化粧土が乗りにくい。(写真 20)
《作品を生乾き状態まで乾燥させる簡易的な方法として、作品を粘土板に載せたままビニル袋などに入れて1週間程度保存する方法がある。》



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20

●色化粧土をつくる

色化粧土は市販のものを使うこともできるが、市販の白化粧土（一般的に化粧土というときには白化粧土を意味することが多い）をもとに、練り込み用顔料を混ぜて簡単に色化粧土をつくるので紹介する。

市販の練り込み用顔料には、「本黒」「コバルト青」「クローム緑」「チョコレート茶」「陶試紅」「チタン黄」「トルコ青」などがある。これら粉末の練り込み用顔料を白化粧土に2割程度混ぜて色化粧土をつくる。

練り込み用顔料を混ぜてできる色化粧土は、無釉で焼成したとき、焼成後の色の変化が比較的少ないので色合いが調整しやすいと同時に、焼き上がりをイメージした彩色ができる。

- ・白化粧土に練り込み用顔料を混ぜる。（写真 21、22、23）
- ・白化粧土をもとにつくった色化粧土（写真 24）



写真 21



写真 22



写真 23



写真 24



写真 25



写真 26



写真 27

《化粧土は混色ができるので、これらを混ぜ合わせてさまざまに微妙な色合いをつくることができる。》

《基本色をつくって、描くときに混色する。》

●生乾きの作品に色化粧土で彩色する

- ・パレットで色化粧土を混色しながら彩色していく。（写真 25）

《化粧土は水彩絵の具と違い、土であるので筆で延ばしにくい。筆に化粧土を取り、置くように彩色する。》

- ・点で描く。（写真 26）
- ・線で描く。（写真 27）
- ・塗りながら色をぼかす。（写真 28）
- ・粘土べらやニードルで化粧土を掻き取ることもできる。（写真 29、30）

●完成したら十分に乾燥させて焼成する

- ・ここでは約 1150℃で焼成した。



写真 28



写真 29

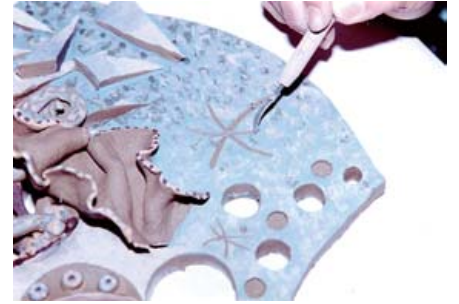


写真 30

表現のバラエティ



写真 31 完成作品 「春の訪れ」〔約 1150℃
焼成／無釉〕（縦 25 × 横 30cm）



写真 32 完成作品 「春の予感」〔約 1150℃焼成／
無釉〕（縦 25 × 横 26cm）



写真 33 完成作品 「秋の思い出」〔約
1150℃焼成／無釉〕（縦 26 × 横 28cm）



写真 34 完成作品 「冬の歌」〔約 1150℃焼成／無釉〕
（縦 18 × 横 29cm）